

霧の中」

2003/03/06 15:34

蕪村については有名な句をいくつか知っている程度で全くの素人です。蕪村周辺については、どこに焦点を当てるか、今思案中ですので、現在気にかかっていることを、自己紹介に代えて述べさせていただきます。

二十代の頃、美術全集でピカソのゲルニカを見た。ショックだった。すごい。勿論、当時はゲルニカの制作背景については何も知らなかった。私は源さんにゲルニカの絵を見せて、どうだ、すごいだろうと言った。源さんは年配の鳶職だった。源さんは、即座に、うんにゃ、俺んこの(茨城県下館市) 松の湯の富士山の方がずっとええ、と答えた。ゲルニカは美術全集に載っているくらいだから名画に違いない、それに作者はピカソだぞ、ピカソの絵が銭湯の絵以下であってたまるもんか、源さんには絵どころなんてわからないんだ、絵を見る目が無い、このわからず屋め、当時、私はそう思った。あれから40年、源さんはこの世にいない。だがこのごろ、私は源さんの評価もまんざら捨てたものではない、と思うようになってきた。源さんの知性が高いか低い、絵どころがあるのか無いのか、それは全く関係がない。それは、源さんが苦勞の果てに見出した価値観であり、人生観なのであった。そう、源さんにとっては、ピカソより銭湯の富士山なのである。

2003/03/16 22:05

大阪万博(1970年)の太陽の塔を、おそらく誰も“芸術”作品としては鑑賞しなかったのではないだろうか。だが、何故か記憶に残る、忘れがたい作品であった。映画に対する「映画ポスター」のように、太陽の塔は大阪万博に対する「万博シンボル」の位置づけと見做されていた。作者の岡本太郎氏も“芸術”作品としてよりもむしろ「万博シンボル」として制作したのではないであろうか。現在、大阪万博資料の保存が計画されている。「太陽の塔、3Dで保存 万博の資料デジタル化へ(2003年02月16日):1970年に開催された大阪万国博覧会の記録を永遠に残そうと、当時の資料や「太陽の塔」などのモニュメント、パビリオンの姿をデジタル化して保存、公開するプロジェクトを万博記念協会が進めている。開催から30年余り。約30万点の資料を集約して散逸を防ぎ、あらためて分析する。対象は、アポロ11号が持ち帰った「月の石」やタイムカプセルなど展示物の記録と、イベントや各国来賓、博覧会を彩った公式ホステスらの写真、各パビリオンの写真や構造が分かる設計図も、万博記念公園で今も威容を誇る岡本太郎氏作の太陽の塔は3次元立体画像を制作し、塔内部の構造も再現する。PR用の「万博ニュース」や、三波春夫さんが歌ったテーマ曲「世界の国からこんにちは」など映像、音楽も保存する。整理が進めば日時を指定して当時のプログラムを振り返ることが可能。完成後はインターネット上で公開し、写真や図面を有料で提供することも検討中という。」画家としての岡本太郎氏は異端であった。一般の美術館では彼の作品を扱わない。だが、彼の作品は「川崎市岡本太郎美術館」で鑑賞することができる。「ロダンの考える人」は一流の“芸術”作品であると教えられてきた。今まで、それを無批判に信じてきた。だが今は、私は「考える人」よりも「太陽の塔」の方が好きだ。

2003/04/03 18:17

ドストエフスキーが好きな人はトルストイを読まない。逆にトルストイが好きな人はドストエフスキーを読まない。若い頃に聞いた、文学好きな友人の言葉である。両方とも好きだ、と言う人に出会ったことはない。どうやら友人の言葉は本当らしい。もっとも全ての読書人に聞いた訳ではないから、百パーセント正しいとは言いかねる。芭蕉と蕪村についても、芭蕉好き蕪村嫌い、芭蕉嫌い蕪村好き、の傾向は百パーセントとは言えないけれども、ある程度言えるのではないだろうか。明治時代、子規が蕪村を評価してからというもの、幾多の俳人が蕪村に傾倒した。芭蕉はごく少数の俳人が評価しただけで、顔色なしの時代であった。平成の現在はどうであろうか。もしかしたら、二人とも無視されているのではなからうか。平成の現在、現代俳句は芭蕉、蕪村からは遠く離れてしまったように思える。こういう時だからこそ、蕪村周辺」で(芭蕉はともかく)蕪村周辺を見つめ直してみる必要があるのかも知れない。現代俳句は芭蕉、蕪村を越えたと豪

語する俳人もいるが、はたしてそうだろうか？ 俳句で評価が極端に分かれるのが、尾崎放哉と種田山頭火ではなかろうか。二人の句を絶賛するグループと、俳句とは認めないグループに分かれる。残念ながら、二人の句は『句集』に堂々と集録されている。権威によって俳句と認定されているのである。現代俳句か古句か、の議論も、もしかして、必要かもしれない。評論家的な言い方をしたが、私自身、子規以降の句より子規以前の句を評価する一人である。もっとも、子規以前の全ての句が、子規以降の全ての句より良い、ということでは無い。現代俳句(特に無名の俳人)にも良い句があり、芭蕉や蕪村にも？の句が結構ある。評価の分かれる典型的な作家に三島由紀夫がいる。好きな人はとことん好きで、嫌いな人は見向きもしない。なんでいいのか、わからないと首をかき上げるだけである。なにしろノーベル文学賞の候補になった作家あるから、三島作品を否定しようものなら、お前には文学がわからない、と言われかねない。とかく芸術作品には、権威によって決定された名画、名作、名句があり、これらの作品が凡人を惑わせる。

2003/04/19 20:18

銭湯に描かれている絵を、芸術作品としての『絵画』と考える人は恐らくいないだろう。では、どうやって、どのような基準で“たんなる絵”(銭湯絵)と『絵画』を区別するのか、と問われると、殆んどの人は(画家は別として)答えられないのではあるまいか。友人の一人はホテルに宿泊すると決まって、部屋に掛けてある『絵』について良い、悪いをコメントする。ホテルの『絵』は『絵画』ではない、と思っている私は、どうでもよいことだと思っている。しかしながら最近、友人のような鑑賞をする人を馬鹿にしてはいけぬ、そんな気がする。中学時代、図工の教師がピカソ流の絵を参考にして、生徒に描かせたことがある。私たちは面白がって、勝手に丸や四角、三角、訳のわからない直線、曲線などを画布に描き散らした。心に浮かんだことを、そのまま描けば良い、と教師は言う。当たり前だが、中学生がどんなに絵どころがあろうと『心の風景』を把握することなどできるはずはないのである。いまにして思えば教師は『心の風景』の重要性を教えたかったのではあるまいか。しかしながら基本的なデッサンも満足に出来ない生徒に、ピカソ流の絵など、描けるはずも無かった。東山魁夷の『道』を思い起こす。この作品は“青森県八戸種差海岸の牧場でのスケッチ”と戦前、戦後の回想から生まれた心の風景”が一つに結晶した絵である、と彼は語っている。ゴッホも弟テオに“心の風景”について語っていた文章を読んだ記憶がある(内容は忘れてしまったが)。銭湯絵には『心の風景』は不要である。これが銭湯絵が『絵画』ではない理由ではないかとひそかに考えている。だが『心の風景』を絵や文章に定着させるのは、決して易しいことではない。

2003/09/24 15:51

仲畑流万能川柳(毎日新聞、9月24日)に次の句が載っていた。

えっこれが大賞なのと見る書道(繁原柏子)

ちょっとひねって、

えっこれが大賞なのと見る絵画

えっこれが秀逸なのと読む俳句

いくらでも替句が出来そうである。ここで句の良し悪しは議論するつもりは無い。およそ芸術作品には、専門家から見れば大賞や秀逸に値するのであるが、素人の私には？の作品が多い。芸術作品の評価基準とは、との疑問が頭をよぎる。

2004/03/06 16:09

江戸東京博物館で円山応挙展を観ての感想。応挙の画風には、生写、真写、実写、気写、虚写があると知る。生写は“物を直接みて描くこと、真写は“真実を描くこと、生写の写実度を高めたもの”であり、生写と真写を総称して実写」と言う。気写は“目に捉えにくいもの、例えば力強さ、躍動感、風情、生命観を描くこと”であり、虚写とは“心の中の風景を描くこと”であるとの説明がある。応挙は『虚実一体空間』の表現に成功したと評される。ふと蕪村の句が思い浮かぶ。蕪村には『虚実一体』の句があるような気がする。蕪村は画業を通して『虚実一体』の句を完成させたのではないだろうか。応挙と同時代の画家に、池大雅、与謝蕪村、呉春(弟子に岡本豊彦)がいた。四条派(蕪村、呉春の系列)は応挙とならぶ流派であつたらし

い、と知る。幸運にも呉春の絵(大乘寺にある「農業の間」で、応挙もここで絵を描いている)を見ることができた。実物ではなく写真であったが、どうやら蕪村の影響を受け継いで、応挙とは違った味わいがある絵であった。応挙の波、水、雨の表現は興味深い。「蕪村周辺」での知識が役にたった鑑賞であった。